

日本グループ・ダイナミクス学会 第65回大会

会場：神戸大学 日時：2018年9月9日(日) 10:30-

シャイネスが援助要請と サポート受容に及ぼす影響

栗林克匡
(北星学園大学)

kuribayashi@hokusei.ac.jp

問題

- ▶ 個人が問題を抱え、それを自身の力では解決できない場合に、必要に応じて他者に援助を求めることは、重要な対処方略の1つである(永井,2013)。
- ▶ この援助要請を規定する要因については、要請相手の種類(永井,2012)、周囲の援助要請規範(後藤・平石,2013)、貢献感と互惠性規範(橋本,2015)、自尊心(脇本,2008)、愛着(永井,2017)、賞賛獲得欲求・拒否回避欲求(原田・出雲,2008)、ソーシャルスキル(渡部ら,2014)など検討が行われている。

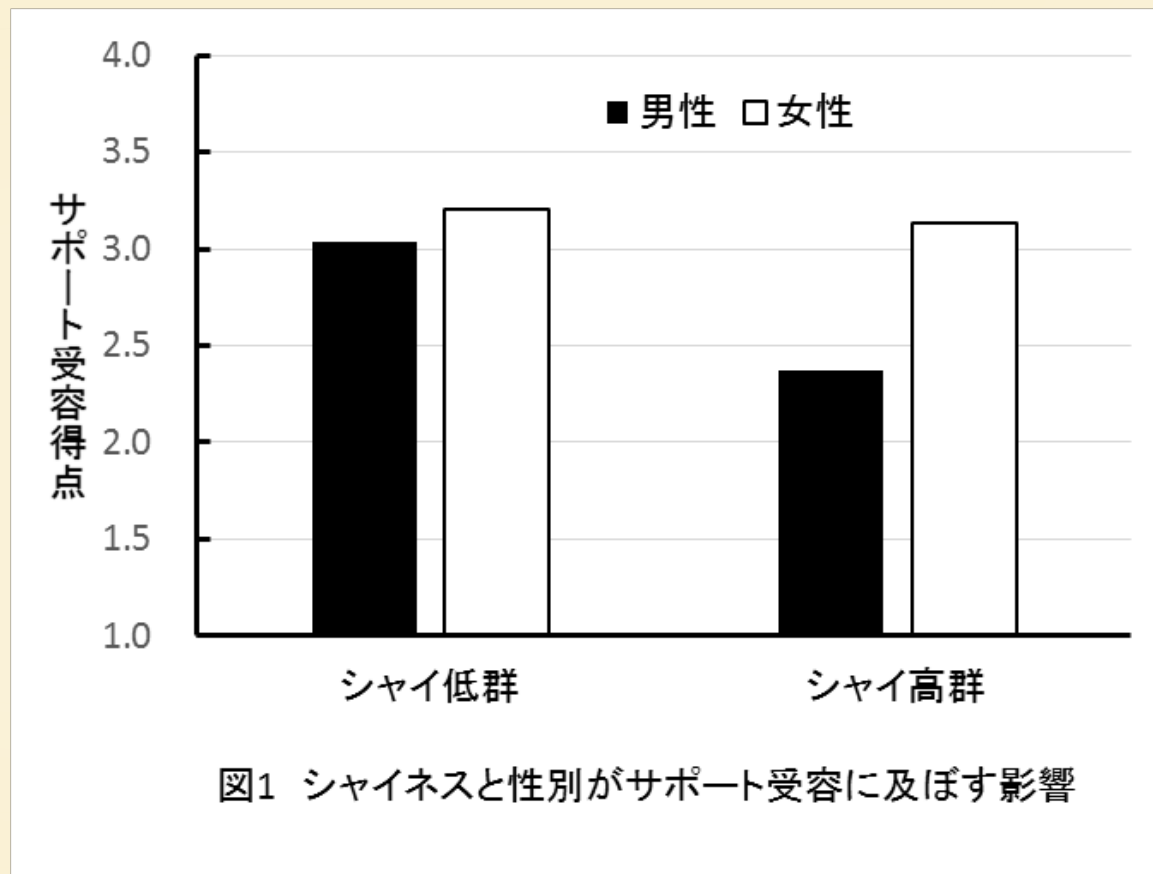
- ▶ 本研究では規定因として個人特性であるシャイネスを取り上げる。シャイネスは「他者から評価されたり、評価されると予測したりすることから生じる対人不安と行動の抑制という特徴を持つ感情－行動症候群」である (Leary, 1986)。
- ▶ シャイネスの高い人は、口数が少なく自己開示に乏しい、声が小さく口ごもる、視線を合わせないなど回避的な行動や過剰な微笑や他者への同意など防衛的な行動といった特徴がある (Nelson-Jones, 1990)。
- ▶ シャイネスの高い者は、他者との関わりで回避的であり、援助要請にも消極的であると考えられる。またそのために必要なサポートを他者から受ける可能性を減じていると考えられる。
 - ▶ 雨宮・松田(2015)は、援助要請とソーシャル・サポートとの関連を検討し、ソーシャル・サポートが援助要請を促進すると考えているが、援助要請があってその後サポートが発生するという因果関係もあるだろう。
- ▶ 本研究ではシャイネスが援助要請およびサポート受容に及ぼす影響について検討する。

- ▶ 調査参加者：大学生151名(男性48名,女性103名)。平均年齢は20.28歳(SD= 1.18)だった。調査は2017年9~10月に実施した。
- ▶ 質問紙の構成：性別・年齢などの基本的属性の他，以下の尺度に回答させた。
 - ▶ ①シャイネス：相川(1991)の特性シャイネス尺度16項目(5段階)
 - ▶ ②援助要請：自分が抱えている悩みについて友人に相談するかについて，永井(2013)の援助要請スタイル尺度12項目(7段階)
 - ▶ この尺度は，永井(2013)の因子分析結果，困難を抱えても自身での問題解決を試み，どうしても解決が困難な場合に援助要請を行うという「**援助要請自立型**」，困難を抱えた際に十分な自助努力を行わずに安易に援助要請を行う「**援助要請過剰型**」，困難な問題を抱えても一貫して援助要請を回避する「**援助要請回避型**」の3因子(各4項目)に分けられる。
 - ▶ ③サポート受容：福岡(2010)の親しい友人からのソーシャル・サポート受容8項目(4段階)

- ▶ 援助要請 3 因子およびサポート受容についてシャイネス(高群・低群)×性別(男性・女性)の 2 要因分散分析を行った(表1)。
 - ▶ なおシャイネス得点の平均値50.08(SD=12.32)を基に高群と低群に分けた。援助要請と受容得点は、該当項目の合計得点を項目数で除した値を用いた。
- ▶ 「要請回避」「サポート受容」で、シャイネスの主効果が有意であった($F(1,140)=4.06, p<.05$; $F(1,140)=8.34, p<.01$)。
 - ▶ 要請回避 : シャイネス高群 > 低群
 - ▶ サポート受容 : シャイネス高群 < 低群

- ▶ 「要請過剰」「要請回避」「サポート受容」で性別の主効果が有意であった($F(1,140)=8.64, p<.01$; $F(1,140)=8.98, p<.01$; $F(1,140)=13.01, p<.001$)。
 - ▶ 要請過剰：女性 > 男性
 - ▶ 要請回避：女性 < 男性
 - ▶ これは永井(2017)と同様の結果であった。
 - ▶ サポート受容：女性 > 男性

- ▶ 「サポート受容」でシャイネス×性別の交互作用が有意であった($F(1,140)=5.45, p<.05$)。シャイネスの高い男性は、他の群に比べサポート受容が低かった(図1)。



- ▶ さらに男女別に、シャイネスと各変数間の関係を検討するためにピアソンの積率相関係数を算出した(表2)。
 - ▶ **男性**はシャイネスが高いほど、援助要請を回避し、サポート受容が低いと感じやすいようである。
 - ▶ **女性**はシャイネスと援助要請およびサポート受容との関係は見られなかった。ただし女性のサポート受容は、援助要請過剰と自立とは正の相関、回避とは負の相関が見られた。

- ▶ 男性と女性の結果の相違は、友人との間で交わされるコミュニケーションの違いが反映されているといえよう。例えば、自己開示については女性の方が男性よりも多くなされている(cf.榎本,1997;高木,2006)ため、シャイな女性でも、友人には個人的な悩みについてもある程度は打ち明けていると考えられる。シャイな男性は、悩みを打ち明けて援助を要請するということができず、結局、十分なサポートを得ることができないまま終わってしまう恐れがある。

表1 シャイネス×性別の援助要請・サポート受容の平均値・SD・F値

	シャイネス低群		シャイネス高群		シャイネスの 主効果	性別の 主効果	シャイネス× 性別
	男性	女性	男性	女性			
援助要請過剰	3.41 (1.76)	4.02 (1.81)	2.73 (1.36)	3.92 (1.78)	1.63	8.46 **	0.89
援助要請回避	3.38 (1.87)	2.87 (1.36)	4.27 (1.51)	3.10 (1.59)	4.06 *	8.98 **	1.44
援助要請自立	4.78 (1.67)	4.85 (1.12)	5.02 (1.13)	5.02 (1.11)	0.90	0.03	0.03
サポート受容	3.04 (0.84)	3.20 (0.68)	2.38 (0.82)	3.13 (0.62)	8.34 **	13.01 ***	5.45 *

* p<.05 ** p<.01 *** p<.001

援助要請は7段階尺度, サポート受容は4段階尺度

表2 各尺度間の相関(対角線の左下が男性, 右上が女性)

	シャイネス	要請過剰	要請回避	要請自立	サポート受容
シャイネス		-.09	.12	.06	-.14
援助要請過剰	-.22		-.55 ***	-.32 **	.36 ***
援助要請回避	.32 *	-.52 ***		-.02	-.36 ***
援助要請自立	.10	-.01	-.04		.23 *
サポート受容	-.45 **	.27	-.19	.12	

* p<.05 ** p<.01 *** p<.001